

Muro Saisei's Dynastic Novels and his Contemporaneous Poems -A Comparison between the novels of Haginojyou and the poems of Miikusa and Nihonnbironn-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-05-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Sun, Yuanyuan メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00058194

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



室生犀星における王朝小説とその同時代の詩

—『萩の帖』と『美以久佐』、『日本美論』を中心にして—

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻
孫 媛 媛

要旨

室生犀星は第二次世界大戦間に王朝小説を多く書いたが、同時に数多くの詩も作った。同じ時期の作品であるが、先行論では犀星の王朝小説と同時代の詩との関係が切斷されて別々に捉えられている。王朝小説は主に典拠との比較で犀星の古典理解の誤りやその書き方の不束さなどを批判されたり、抒情や創造などの美しさを評価されたりしている。それに対して、同時代の詩は戦争に協力したところから批判されて低く評価されている。犀星自身も戦後、筑摩書房の『室生犀星全詩集』を編集した時、戦争による「心のにぎりを見たくない」という理由でこの時期に作られた詩を削除したことがある。このように、犀星の王朝小説とその同時代の詩とのつながりは分断されている。しかし、犀星の王朝小説と同時代の詩を比較すると、多くの共通点も見えてくる。本論文では、犀星の王朝小説集『萩の帖』と同時代の詩集『美以久佐』、『日本美論』を比較して、それらの共通点を考察しながら犀星の王朝小説と同時代の詩の関係を分析して、隠されている事実と意義を探求する。

一、王朝小説と同時代の詩の関係についての批評

一九四〇年から犀星は多くの王朝小説¹を書いたが、同時に詩も数多く書いた。同じ時期の作品なのに、先行論ではこれらの王朝小説と詩の関係は切斷されて別々に捉えられている。王朝小説は主に典拠との比較でその古典理解の誤りと書き方の不足を批判されたり、抒情や創造などの美しさを評価されたりしている²。例えば、吉田精一は「あまりにも王朝の風俗習慣、その他の歴史的な土台をふみにじつっていることだ。官職身分の知識の不足はさて置き、語法会話のふつつかさ、時に用いている王朝様の文体（手紙）などのしどけなさは、時に眼を蔽わせるものがある³」と指摘しながら、「室生さんの平安朝を材料、もしくは背景とした小説は、一言でいえば、優美な抒情詩だと思う⁴」とも語っている。それに対して、同時代の詩は戦争に協力したところから中野重治の述べたように、「内から発しないで外から作られた」ものであり、「犀星詩そのものに対する悲しい裏切りの姿」を示していると批判されたりしている⁵。犀星自身も戦後、この時期の詩を再編集したとき、戦争による「心のにぎりを見たくない」という理由で数多く削除した⁶。また、犀星の王朝小説についての議論は多い⁷が、同時代の詩に関する研究は少なく、僅か二本⁸ほどの論文がある。こ

キーワード

犀星 王朝小説 詩

こでは王朝小説は同時代の詩より評価が高いと言える。このように、批評された内容にしても、議論された量にしても王朝小説と同時代の詩に対する扱い方は犀星文学において異なっている。なお、王朝小説と同時代の詩はあまり一緒に論じられていないよう見える。更に、王朝小説と同時代の詩の関係がはつきり論じられているのは犀星に親しんだ伊藤信吉の『室生犀星 戦争の詩人・避戦の作家』⁹だけである。そこでは、次のように述べている。

犀星は詩と戦争時局にかかる意見や感想を発表したが、しかしその一方、戦争小説、戦争時局小説、戦争国策小説を書かなかつた。当時の著名作家で戦争小説、戦争時局小説を書かぬ人がどれほどいたか。私は作家たちの生活や執筆状況、つまり文壇事情というものを見など知らぬので、具体的に誰々がそうであったと言うことは出来ないが、室生犀星という一人の作家において、戦争小説、戦争国策小説が無かつたことに、私は驚きを新たにする。

(中略)

詩人たちがほとんど例外なしに戦争によって突きつけられ、文學報国に動員されたこと、犀星がその戦争詩人の一人だったことは前述したが、彼は詩人としての自分の姿勢について、自分は「ほとんど戦争以外の詩はかないほど多くの愛國詩を書いた。」(〔神国〕)と言つた。

ここにいたつておもうのは、犀星における詩と小説との内的関係である。前述のように犀星の戦争詩は数的に割と多くなかつたけれど、それでもそれらの作品によつて、戦時の発言、戦時の言辞、國家的思考めいた物言いが多分にあつた。呼号も怒号も、戦意昂揚的言辞も、およそのところ不足なく表現した。

ゆえに犀星は戦争詩に戦争小説をかさねる必要がなかつたのだ。戦争詩があるゆえに、小説は戦争から離れて、もしくは逸れている

ことが出来たのである。
別言すれば詩人・作家室生犀星は、詩に戦争を背負わせることによつて、詩を犠牲にし、詩を虐待することによつて、小説においては戦争を避け、傷つけることを避けたのである。
詩の犠牲は意識的だったか、無意識的だったか。おそらくは意識的だった。

ここで、伊藤は戦争に関わるかどうかで詩と小説の関係を論じている。詩は戦争と深く関連しているが、小説は「戦争から離れて」いる。そして、時代性で詩と小説のつながりは分断されている。また、「詩を犠牲にし、詩を虐待することによつて、小説においては戦争を避け、傷つけることを避けた」という叙述から、詩は小説を守る道具になつて、価値が低い存在であると理解されていると言える。言い換えれば、犀星文学においては詩と小説の地位が異なつてゐると思われている。なお、暮尾淳¹⁰によると、伊藤は犀星が王朝小説などで戦争を避けたとも述べていたことが分かる。すなわち、この時期の王朝小説は同時代の詩に守られて作られたものである。このように、犀星文学において、王朝小説は大事なところに置かれているが、同時代の詩は時代の傷として見下されている。

以上のように、犀星の王朝小説と同時代の詩の関係は一見無関係のようく切斷されているがその実、小説を守るためにカムフラージュとして詩が犠牲にされているとも言える。

しかし、王朝小説集『萩の帖¹¹』を詩集『美以久佐¹²』、『日本美論¹³』と比較すると、共通点が少くないことが分かる。したがつて、王朝小説と同時代の詩の関係が考えられる。以下、それらの共通点を検討しながら、両者の関係を探求する。

一、王朝小説と同時代の詩の共通点

犀星の王朝小説とその同時代の詩の関係を検討するために、王朝小説集『萩の帖』を詩集『美以久佐』、『日本美論』と比較する。そして、王朝小説集と詩集には内容の表現、色などの言葉遣いにおいて共通点があることが分かる。これから、こうした共通点を考察することによって犀星の王朝小説と同時代の詩との関係を考える。

まず、内容の表現から検討する。一つは「えにし」についての描写である。『萩の帖』に収録されている王朝小説「えにしあらば」（『中央公論』・一九四二年三月一日）では、女主人公である初瀬と男主人公である大和は三回出会つてお互いに恋に落ちたが、様々な事情で最後に結ばれなかつたという話が描かれている。そこでは、えにしの議論が出された。その場面は以下のよう書かれている。（引用は『萩の帖』による。以下の王朝小説の引用はすべて同じである）

「御健祥に拝せられ初瀬お懐かしいかぎりにござります。」

「御身にもすこやかにて大和喜びにぞんじます。三度お逢ひして三度とも處が変り、つひに此處まで参り申した。」

「もうこれにお目もじいたします」とも、「ございませぬやうに思はれます。」

「ま」と三たびもえにしがり申したに、我らのえにしはいつもえにしにすらならずに終り、大和口惜しくぞんじ申す。」

「わらははただ清き思ひを抱き生きたうござります。」

初瀬の頭は垂れ、長いくるがみだけが大和の眼に漆のやうにけぶつて見えた。えにしはもう結ばれさうなところで、いつも美事に酷たらしく逸れてゐた。

これは一人が三回目に会った時、二人のえにしについて語る場面で

ある。彼らは深いえにしがあるのに結ばれないことを惜しく思つてゐる。それは一種の運命に逆らえない無力感であると言える。その後、初瀬は離れた大和を追いかけたが、間に合わなかつた。こうして三回目のえにしが終わつた。えにしがないままに物語が終わつたのである。えにしがないのは物語のモチーフであると言える。しかし、作品のタイトルは「えにしあらば」である。すなわち、えにしがあるように祈るという意味だろう。また、同じように『萩の帖』に収録されている王朝小説「狩衣」（『八雲』・一九四二年八月）では、主人公である掃部助が官職のないことで一人の女に捨てられて最後に運命の人に出会つたという話が書かれている。自分を捨てた二人の女について、掃部助は「どれもみな運縁ばかりの者にて掃部助、恥かしうござる」と結論づけた。つまり、掃部助は自分を捨てた二人の女とのえにしが良くないと考えている。ここでも、えにしについての議論が示されている。しかも、男女の関係がうまく行かずに別れた方は注目されていた。それでは、えにしについてその同時代の詩ではどのように描かれているだろうか。

実は、王朝小説「えにしあらば」（『中央公論』・一九四二年三月一日）と同じ日に同じタイトルで発表された詩がある。それは詩集『美以久佐』に収録されている詩「えにしあらば」（『新創作』・一九四二年三月一日）である。（引用は『美以久佐』による）

えにしあらば

えにしなき人の物語、
けふもつづれば
わが越し方に似も似しものかな、
えにしなきともがらはいまいづこぞや、

黄なる衣つけ

紫なる衣つけ

はた蘇芳のいろの衣つけ

北海道に行き

死にはてしひと、

朝鮮にゆきつるに行衛知れざりし人、

えにしなきともがらはいまいづこぞ、

えにしあらばとはわが願き」となれど

えにしなきひとびとらつるにえにしはあらざれ。

ここでは、人々が別れた話が描かれている。「黄なる衣」や「紫なる衣」、「はた蘇芳のいろの衣」を着ている人々は北海道や朝鮮などを行つた。そして、「えにしなきひとびとらつるにえにしはあらざれ」という最後の句のように、別れた人々は再び戻れなかつた。言わば、本文の通りに彼らは行方不明になつたり、死んだりした。したがつて、この詩は別れた人々との再会のえにしがない物語である。しかし、詩のタイトルは「えにしあらば」になつてゐる。このように付けられたのは「えにしあらばとはわが願き」という表現のためではないか。別れた人々の再会できるえにしがあるようによると、この点は王朝小説「えにしあらば」と同じであると言える。

また、この詩は短いのに「えにし」という言葉がタイトルを入れて七回使われている。「えにし」は強調されているように見える。そして、この詩の主人公は「えにしなきともがら」に対して、行方を尋ねたり、再会の「えにし」があるよう願つたりする。つまり、再会は期待されている。更に、「えにしなきともがらはいまいづこぞや」「えにしなきともがらはいまいづこぞ」と尋ねる呼声から別れた人々と再会したい強い気持ちが読み取れる。したがつて、「えにし」を繰り返して使うのもこの気持ちを強めるためであると考えられる。繰り返しの使用によつてえにしのことを読者の心に深く根付かせる。そして、

強い気持ちもうまく伝えられるようになる。この強い気持ちは一種の執着であると言える。言い換えれば、これは別れた人々との再会のえにしへの執着である。執着にも関わらず、物語では、結局再会できなかつた。最後の句には悲しみが溢れている。そのため、再会したい気持ちは一層強くなつていて、それに対しても、小説「えにしあらば」において示されている再会したい気持ちは詩より少し弱い。なぜなら、小説「えにしあらば」で、大和と別れて失恋した初瀬は兄に慰められたからだ。物語の最後は温かい。えにしがない辛さは少なくなつた。そのため、えにしへの期待は弱くなつていて、

いずれにせよ王朝小説「えにしあらば」と詩「えにしあらば」には共通点がある。両方のタイトルは言うまでもなく、発表された日も皆一九四二年三月一日で同じである。また、両方はともにえにしを取り上げて作られたものである。小説「えにしあらば」は男女の別れの話であるが、人々の別れの物語もある。詩「えにしあらば」は人々の別れの語りである。人々の別れを描くのは両方の共通点であると言える。言わば、えにしがないのは両方の共通なモチーフである。えにしがあるようによると、この点は王朝小説「えにしあらば」と同じである。皆は別れた人との再会を期待している。最後に、同じ日に発表されたことを踏まえて、詩での「えにしなき人の物語」という句は小説「えにしあらば」と詩「えにしあらば」の「えにしなき人の物語」という句は小説「えにしあらば」と詩「えにしあらば」の裏表の関係が見えてきた。表では、小説「えにしあらば」で男女の別れが書かれている。裏では、詩「えにしあらば」で人々の別れが描かれている。別れを語ることによって、両者は繋がれている。しかも、詩「えにしあらば」は小説「えにしあらば」まで取り入れて物語を作る。このように、犀星が小説「えにしあらば」を創作することから、現在の自己を語る詩「えにしあらば」へ移るという姿が描かれている。

さて、もう一つの内容における共通点は戦いの場面描写があることである。これらの描写については、「萩の帖」に収録されている小説

「巴」¹⁴（『婦人公論』・一九四二年九月）と詩集『美以久佐』を通して考察する。「巴」で一番感動的な場面は女主人公巴の「栗津が原の戦ひ」である。その一部分を取り上げて検討する。

「胴をとれ。」

「組み打て。」

「取り付け。」

そんな敵の叫び声は、そのまま打ちやられ、誰も巴の巨大な胸と胴に組みついて行く者はなかつた。寄れば刀で掃かれた。寄りつけられなかつた。巴自身も組みつかれたら自分の最後であることもとうに知つてゐた。巴自身の眼もくらやむやうなぎ方の迅さに、

彼女は自分を信じ切つてゐるのだ。大きな人間が眼の中まで飛び込んでくるやうな瞬間の危なさに、一歩退つて一息だつた。
「があ……」

と、人は殺されて行つた。

ここでは、「戦ひ」の激しさがよく表現されている。特に、「胴をとれ」、「組み打て」、「取り付け」という「敵の叫び声」は聴覚からその戦闘の残酷さを生き生きと描き出している。「があ……」という声もさらにその熱い戦場を浮き彫りにする。また、「大きな人間が眼の中まで飛び込んでくるやうな瞬間の危なさに、一歩退つて一息だつた」ことから、戦場における危なさと緊張が感じられる。そして、女主人公巴はこのような危なさを恐れずに、勇敢に前に進む。彼女の強さはこの場面を通してよく示されている。巴はやつと愛する義仲のところに着いたが、一緒に死ぬことが出来なかつた。代わりに、「木曾へ行け、母びとをお守り申し上げ」と言い付けられた。ここは女性の戦闘における役割も表れている。つまり、戦場にいない母親たちを守ることである。

このように、小説「巴」では古代の戦いが描かれている。戦いにおける女性の役割も強調されている。それに対して、同時代の詩は第二次世界大戦の一端を語っている。戦いの時代は異なる。小説「巴」と同時代の詩は無関係のように見えている。しかし、両者を繋ぐところはないだろうか。これから、小説「巴」と同時代の詩を集めている『美以久佐』での詩「日本の朝」と詩「女性大歌」を考察して両者のつながりを検討する。詩「日本の朝」では、若者が戦場へ向かつて戦う様子を描いている。（引用は『美以久佐』による）

(前略)

あの日から日本の土に

日本の地図がどういうふうに植えたか、

どういふ樹々の花々

どういふ鳥と魚とが泳ぎ出したか、

優しい街の靴は脱がれ、

若人らは鉄の帽子と

鎧だけの靴と

砲列と

軍歌と

呐喊と

勝鬨と

そして土をゆるがして進んだ

マレーへ

シンガポールへ

火と水へ

未来へ

そして日本はふくれた

(後略)

「」でも、戦争の熱さが感じられる。「若人らは鉄の帽子と／鍔だけの靴と／砲列と／軍歌と／呐喊と／勝鬨と／そして土をゆるがして進んだ」というところから、賑やかな戦場は想像できる。若者たちは國士を広げるために気楽な生活を棄てて兵士としての身なりを整えて軍歌を歌いながら戦場へ向かう。戦場に着いたら、大砲を並べて一生懸命呐喊しながら、天地を搖がすほどの勢いで敵と戦う。そして、一つのところを陥れたら、次々と進む。「マレー／／シンガポール／／火と水／／未来へ」という戦場の残酷さを恐れずに勇敢に絶え間なく進む様子からは昂揚する戦意が伺える。詩「日本の朝」は戦場における軍人の威風堂々としている様子をいきいきと描き出している。

このように、近代の戦いは描かれている。また、当時の女性はどのように語られているのか。それについては、「女性大歌」で次のよう

に記されている。(引用は「美以久佐」による)

(前略)

をみなゆえ劍はとらず
いくさにはゆくことなけれど
おさなかる子をまもりて
おさなかる子ををしふる。
ひのもとのをみなぞわれは
ひのもとのははなりわれは、
ひたすらいへをまもりて
すめらぎのおもきにかん。

ここで、銃後における女性の重要な役割が語られている。それは幼い子供を守つて教えて家を守ることである。この守りは小説「巴」での「母びとをお守」ること似ている。戦いの時代は異なっているが、両者は皆戦いにおける女性の果たすべき役割を示している。それは守

ることだ。

以上のように、小説「巴」にしても同時代の詩「日本の朝」、「女性大歌」にしても戦いと女性の役割を表わしている。ただ、この戦いは時代が異なっている。一つは古代の戦いであり、もう一つは近代の戦いである。また、小説「巴」では、戦いで女性の役割について、守る以外に、戦場で戦うことも示されている。こうした描写は女性の柔らかさに強さを添えている。そして、女性の美は一層表現されている。それにもかかわらず、戦いと女性の守る役割への注目において両者が共通している。また、小説「巴」は歴史の戦いの話であるが、第二次世界大戦期間に書かれているので、その大戦に刺激されて作られたものではないとは言い難い。この刺激によって犀星は戦いと女性の守る役割に目を向けるようになると考えられる。

更に言えば、ここにも、前述した裏表の関係が見られる。表は歴史の戦いを示している小説「巴」である。裏は第二次世界大戦を描いている同時代の詩「日本の朝」と「女性大歌」である。同時代の詩「日本の朝」と「女性大歌」は第二次世界大戦を描くものである。小説「巴」は第二次世界大戦に刺激されて作られたものである。戦いへの描写で両者は深く繋がれている。

このような関係は以上だけでなく、和歌への注目と議論にも見られる。

周知のように、和歌は平安時代の社会的な交流の手段である。「伊勢物語」や「大和物語」などの歌物語においては和歌が欠かせない存在である。和歌は物語の中心である。それでは、「伊勢物語」や「大和物語」などに取材して書かれた犀星の王朝小説で、和歌はどのように表現されているのだろうか。『萩の帖』を考察して和歌に触れたところを確認する。

小説「えにしあらば」では、「ああいふ寥しい処を毎年のやうに訪づれるといふことは、和歌をものする女のならひではないか」という

箇所がある。ここだけではなく、初瀬は和歌によつて大和と交流した。この交流によつて、初瀬と大和の感情は深まつた。

また、小説「狩衣」では、男主人公掃部助は二人の女に捨てられた後、運命の女である織江に会つた。そして、掃部助は恋に落ちて織江を妻として迎える。織江はその迎えに対しての感謝として、和歌を作つて掃部助に送つた。掃部助は読んで大喜びして彼女の和歌と字を褒めた。このように掃部助と織江の感情を深めた。同時に、織江の美しさも表現されている。

小説「えにしあらば」と小説「狩衣」では、和歌は触れられているものの、物語の一部分を占めているだけである。しかし、『萩の帖』に収録されている王朝小説「萩の帖」(『婦人朝日』・一九四二年一〇月一日、『週刊婦人朝日』・一九四二年一月四日～一二月二三日)では、和歌は物語の全体を占めている。和歌についての小説とも言えるほどである。そこでは、和歌による交流だけではなく、和歌の書き方についての議論も多く書かれている。これから、その交流と議論を検討する。

「萩の帖」の「第一話」で、歌の会が語られている。それは和歌の芸術的な交流のためではなく、大和の妻である梅路が夫を高い官位に昇進させるために、高い官を誘つて招待する会である。それゆえ、気高い大和は和歌が上手であるが、その会に出席しなかつた。ここでは、梅路の卑しさと醜さ、妻に理解されない大和の寂しさが表現されている。夫婦の間に愛情がないと考えられる。これは後の展開の伏線となつていて。その後、梅路は家出をして行方不明になつた。そのため、大和は好きな人と結ばれて最後に幸せな人生を迎える。また、この話では、大和は和歌の作り方について妹綾野と議論したことも記されている。

「お歌といふものはお兄上様、本当にあること、あつたことを詠ふ

ものでせうか。本当をはなれて歌の道がありうるものでござりますうか。お教へくださいませ。」

「ほんたうの事のほかに歌は存在しない。すべてのことに嘘は排すべきだが、歌は眞実のなかでも正味のほんたうを捉へて詠むものなんだ」という叙述から、和歌は眞実を描くものであると理解できる。「嘘をうたつてはならぬ」のは大和にとって和歌を作るルールである。そして、その眞実は実の世界ではなく、精神の世界である。すなわち、心中で出来てゐるものは眞実にないとしてもそれが眞実である。そのため、現実に恋人のいない大和は人を恋しく思う和歌が作れるのだ。大和の心では恋人がすでに出来た。また、ここでの「眞実」は「よき人」である。その「よき人」は虚構の人であり、フイ

「嘘をうたつてはならぬ。」
「ではお兄上様はいつも女の方をおうたひになつていらつしやる。それなのに、お兄上様にはよき人さへございませぬ。それはお嘘をおうたひになるのではないでせうか。」「いや、わしの心にはほんとの人と同じ人がもう出来上つてゐる。人間は一人の女人の人をあてにして学んだり勤めたりしてゐるうち、心にはまことの人によく似た女人人がちゃんと坐つてゐて、その人が世の中の女人の人を選ぶやうになるのだ。綾野、そちにしても、かういふ人がよいといふ考へをお持ちだらう。女にもあるやうに男に寄せて人は歌を思ふのだ。そちはどういふ人が好きか。」

このように、和歌の作り方について大和は自分なりの考え方を綾野に教えている。「ほんたうの事のほかに歌は存在しない。すべてのことに嘘は排すべきだが、歌は眞実のなかでも正味のほんたうを捉へて詠むものなんだ」という叙述から、和歌は眞実を描くものであると理解できる。「嘘をうたつてはならぬ」のは大和にとって和歌を作るルールである。そして、その眞実は実の世界ではなく、精神の世界である。すなわち、心中で出来てゐるものは眞実にないとしてもそれが眞実である。そのため、現実に恋人のいない大和は人を恋しく思う和歌が作れるのだ。大和の心では恋人がすでに出来た。また、ここでの「眞

クションであることを指している。つまり、和歌を作るにフィクションを求めるべきであるとは強調されているように見える。このフィクションは嘘と異なっている。「嘘をうたつてはならぬ」という表現はフィクションを求めるのと同じである。したがって、大和の心で出来た恋人はフィクションであると言える。この議論から大和の和歌の才能だけではなく、妹綾野との深い感情も見られる。なぜなら、綾野は大和と精神まで深く交流しているからだ。

第二話では、前述した歌の会をめぐる大和と梅路の不愉快さが描かれている。この不愉快さを通して、この兄妹の感情の深さが一層よく表現された。

第三話は、大和が好きな人に出会う物語である。妻との不和のため、大和はよく出かける。そして、好きな女に出会った。ここでも和歌をめぐって話が成り立っている。み代は父より和歌を勉強したので和歌の名人としての大和をよく知っている。したがって、大和の身分を見分けることができた。更に、み代の父の和歌を通して大和と熱く話して二人の感情を深めた。この中にも和歌についての議論がある。その議論の場面は以下のように書かれている。

「父はかういふ暗い歌ばかり書いてゐられました。お蔵番でございましたので、その一部屋にこもりながら虫の声と灯だけがお友達でございまして、わたくしが栗など和へて持つてまゐりますと、よく読み聞かてくれたものでした。わたくしにも詠めと申され、わたくしの持つてまゐる紙を綴じて帖とされてゐました。歌は上達しないあひだは沢山作歌するやう、そのうち次第に作れなくなつたらその時はやつと歌がお前にわかりかけた時分だと申してゐました。」

「うむ、お父上の申されたことは立派な一家言だね、歌が作れなくなつた時はやつと歌といふものが解りかけた時分だ、その言葉にくるひはないな、わしにしてもそれほどの名言は口をついて出ない

……」
「名言はおそれります。」

「お父上はたしかに歌の奥に這入つてゐられたことは、よく分るね。ただ一人でお書きになりそれを一人で棄ててゐられたのが、行きづまりになつたのだな、誰にも見せないで一人で書いてゐることはちよつと恐いな。」

「何故恐いのです。」

「遁世するやうになるのだ、世界の人と没交渉な生活をするやうになる、自ら死をえらぶやうになつて了ふ。」

ここも深い議論であると言える。「歌は上達しないあひだは沢山作歌するやう、そのうち次第に作れなくなつたらその時」はやつと歌が「わかりかけた時分だ」というのはみ代の父の考え方であるが、大和にも賛成されている。また、他人に見せずに和歌を作るというやり方は自殺のようなものだと結論付けた。このように、父の和歌の討論を通して、大和とみ代はお互いに知るようになつて関係が親密になつた。つまり、和歌は物語を支えていると言える。

第四話では、歌の作り方をめぐって、大和と親友鹿門の争いが記されている。鹿門はざれ歌を作り、その歌が全国に広まつた。そして、その歌に対して大和は次のように批判している。

「あれが堕落の歌か。」

鹿門は寧ろ人ごとのやうに、無関係な調子だつた。

「下司で恥知らずでそのうへ善良な人心を毒する歌だ、あの歌があと永く続くとしたら頬廻の兆になる。……」

「そのもとは大き過ぎる。何の歌一片ではないか。」

「その歌一片が恐ろしいのだ。まだあの程度の歌ならないのだが。」

「これは大和としては寛大なお裁きだ。」

「だがの鹿門、國民にああいふ小唄をうたはしては、民の心に頗廢の氣持を広げるぞ。わしはある唄を禁じたいと思つてゐる。」

「いまさらあの歌を取り上げることが出来るか、恰度、あの唄の心も民の間にならないでもない、寧ろ、虚をついた形だ。」

「だから禁じたいのだ。もつと大和の國の美しさを讀へた歌をうたはしたい、人心を高きに従かしめるためだ。」

ここから、大和は鹿門のあはれな女心を捉える「卑俗極まりない情欲的¹⁵」であるざれ歌を厳しく批判していると分かる。彼はそのざれ歌が墮落の歌なので國民を頗廢させる歌であり、禁じるべきものだと唱えている。そして、「大和の國の美しさを讀へた歌」、「人心を高きに従かしめる」歌を作るべきであると主張している。このよくな議論に対して、鹿門は次のように述べている。

「大和、ぢや言つて遣らう。あれの作者はおれだ。おれは墮落はしてゐない。」

「やはり汝が、有為の才、巷の泥をあびるといふ奴だ。」

「何の、歌は泥をあびなければ生きないので。」

「言ふな、市に出て石など叩いてざれ歌に生涯を覆り返して溺れる、國民の精神を誘うて危なきにつかしめる奴は、もはや歌人の相貌さへ持つてゐない奴だ。」

「何を上品振つた大歌人が宣らす。國民を教へるには低い言葉がいるのだ。わかりやすい言葉で導くことが何故悪いか、汝は世間を知らない。」

「され歌人、街頭で昆布壳の呼声と競つて去るがいい。」

「くさつた女どもに崇められ生きてゐる雲間の歌人よ、汝といづれが歌の王座につくか、永い生涯を賭けて見よう。」

「泥歌作者と生涯を競争することは断る。汝はまことの歌の心を失

ひつつあるのが分らんか。」

「失うて再びつくり上げるのが歌の本来の精神なんだ、守りつづけてゐる古い歌が何になる。」

「もう黙れ。」

このよくな、鹿門は大和に反撃している。彼は歌が國民の「泥をあびなければ生きない」ものであると強調している。國民を教えるのは低くて分かりやすいことばが必要だとも考へてゐる。つまり、歌は一般人の世界に合わせて書くべきものである。とにかく、大和にしても、鹿門にしても、歌の作り方を眞面目に考へてゐる。それは熱い争いである。

第五話は大和と鹿門がみ代のところで仲直りした場面である。この間に、自分のざれ歌について、鹿門はみ代に聞いたが、嬉しい評価を貰つた。第六話から第九話までは、ざれ歌のために、綾野はかつて一度断つた鹿門に恋に落ち、行方不明になつた彼を多くの処を回つて捜して最後に連れ戻してゐる。

ここまで、「萩の帖」では和歌の作り方だけでなく、和歌から戯れ歌の変化も見られる。

以上のように、犀星は王朝小説の創作で和歌を使つたり、議論したり、変化させたりした。
さて、同時代の詩では、和歌がどのように表現されているだろうか。これから、詩集「日本美論」に収録されている詩「和歌」を分析して考へる。以下はその詩である。

紙は皺になり

たたまれると悲しくなる、

紙はぢつとしてゐると神に近い、

紙はうつ向く、

うつ向いて吹かれると
吹かれると

野の中で消えてしまふ、

あとかたもなく、

白い雲にもなれないらしい、

紙は皺になり

皺のあひから和歌を見せる。

和歌は羞かみ

平安乙女に似た眼を伏せる。

紙は中まで真白になり

へりの方で世界と関係を絶ち

さびしさうに形をまもる。

長方形の上に山々がそびえ

下の方で

海から立つ白浪がけぶり

僕の手はぬれ

僕は浪を切る。

ここも和歌が描かれている。「紙は皺になり／皺のあひから和歌を見せる。／和歌は羞かみ／平安乙女に似た眼を伏せる」という叙述は和歌の表現の形式を語っている。「紙の皺」は詩「和歌」と同じに「紙の世界」に納められている詩「平原」、詩「人は」や詩「紙」を通して、紙に書き土がつた物語であると捉えられる。皺の間は物語の世界を指している。「皺のあひから和歌を見せる」にしても、「和歌は羞かみ／平安乙女に似た眼を伏せる」にしても、皆は和歌が単独で現れるのではなく、物語と一緒に出る。言い換えるば、和歌は物語の中に存在する、あるいは物語は和歌を使って作られるということである。また、「平安乙女」という表現は平安時代を思い出させる。犀星の王朝小説

の創作時期を踏まえて、ここでの和歌は王朝小説の中の和歌であると考えられる。「紙は中まで真白になり／へりの方で世界と関係を絶ち／さびしさうに形をまもる」という描写も現実の世界からかけ離れていることを表わしている。犀星の王朝小説は主に平安時代を中心としているので、現実の世界との関係を断つてはいる。この断つた関係はこの和歌の描写に合っているように見える。そして、「僕の手はぬれ／僕は浪を切る」という表現から、犀星は積極的に和歌を勉強して吸収して物語を作ることを表わしていると理解できる。この詩については、九里順子も「いにしえの歌物語から歌の海を泳いでいく自画像へと時間を作っていくことで、「紙」が遺し伝えていくものを示す¹⁶」と述べている。すなわち、この詩は平安朝の歌物語を読みながら、和歌を勉強する犀星を示していると言われている。ここから、「日本美論」の詩「和歌」と犀星の王朝小説の創作の親密な関係が見られる。更に言えば、この詩「和歌」は第二次世界大戦期間に王朝小説を作るために、犀星が『伊勢物語』と『大和物語』などの歌物語を読んで和歌に触れる姿を表現している。ここも前述した詩「えにしあらば」と同じように、王朝小説の創作のことを記している。ただし、詩「えにしあらば」では創作した内容が書かれている。詩「和歌」では創作した犀星の様子が描かれている。このように、王朝小説と同時代の詩における裏表の関係はここでも見られる。表は王朝小説集『萩の帖』である。裏は詩「和歌」である。表と裏は王朝小説の創作で和歌に触れるこによって繋がれている。

以上のように、犀星の王朝小説集『萩の帖』と詩集『美以久佐』、『日本美論』とはえにしあらの執着や戦いの描写、和歌との接觸において共通している。そして、犀星の王朝小説とその同時代の詩には内容における共通点があると言える。これらの共通点から、当時の犀星の様子は考えられる。戦争による人々の別れのため、「えにし」のことと作品に取り入れた。戦争に刺激されたゆえに、戦いの描写に目を向

けるようになつた。王朝小説を作るために、「伊勢物語」や「大和物語」などの歌物語を読んで和歌に触れたので、和歌を使つたり、和歌を議論したりするようになつた。また、王朝小説において和歌の使用は平安時代に合わせるためもある。和歌の作り方は議論されているが、実際は詩の書き方も論じられているのではないか。すなわち、和歌を論じることを借りて同時代の詩を論じるということである。「萩の帖」で大和の国の美しさを讃えた歌を作るべきという考え方の故に、『日本美論』が作られたのではないか。タイトルだけから、大和の国である日本の美しさに注目する詩集であると分かる。ここだけではなく、この考え方は犀星の「神國¹⁷」からも捉えられる。その描写は少し長いが、引用する。

戦争前何年かに大阪の放送局から朗読詩といふものが、春とか秋とかにたまに放送されることがあつた。それは四十行くらゐの詩がいくらかのよくやうをつけて内容を助成しながら読まれたものであつたが、十分とか十五分くらゐの僅かな間であつたから、誰も気をつけて特別にそれを聴き入らうとする熱心さのある聞手はなかつた。それを尤もよく聴き入るものは作者の詩人くらゐだつたに違ひない。成功でもなく失敗でもない、いはば、あつてもなくともいいものであつた。それにも拘らず懲りずに時々息つきのやうに詩は所定の日に朗読され詩人らは一年に一度くらゐづつその制作に従つたのである。時は移り年を経て大東亜戦争がはじまり、勝利の怒涛は日本全土を蔽うた。人びとは国をたたへるための適当な短い言葉をほしがり、また、つはもののいさを呼ぶためのほぎ歌をもとめた。何でもいいから勇ましい勇躍のこころを述べた歌が皆になくてはならないものになつた。その時、突然に戦争詩が嘗ての失敗に似た例をも考慮せずにうたはれ、朗読された。人びとはそれをじつと聞き入りその短い言葉にはじめて盛られた小気味好い淫刺さと、自分ら

の考へや感謝の心を高く歌ひ上げてゐることに喝采した。詩といふものはよく分らんが、他の誰のものではなく、国民のものであり心であることだけは分つた。そして詩はともしびのやうに人びとの頭にとどめたのである。

詩は絶間なくそれぞれの人びとによつて朗読され、あるひは絶叫された。その時間になるとみんなは詩といふものは決して難かしいものではなく、分りやすいものだといふ解釈のもとにラジオのそばに入びとは集まつた。僅か三分か三分半くらゐの短い詩は單的に戦争といふものの精神や労苦や勝利を、うまく、さうあらねばならぬ国民の心がまへを表はして、烈しい勢ひで人の心にむすびついた。何年か前に聞き入らうともしなかつた人びとは此の不思議な魔術のやうな言葉に刺戟されて聞き入つた。そこには民の心を高めるための絶叫も、また、しめやかに雨ふる田園にふとる野菜や、果実がどのやうに豊かな色と匂ひとを人びとにあたへてゐるかといふ、そんなあたらしい畠物の見方が教へられ神の国の四季をめぐむ自然のありがたさがうたはれてゐた。神の国のみどりなす畠のものはその土のなかに持つ圓い球や、長いじねん芋や、赤と朱のいろいろの人参などをゆたかに人びとにあたへた。詩はそれらをも含めて謡つた。詩は工場や職域や街区をうたふためにいかに勝利が人びとの心を固め、とき澄ましてゐるかに最大の注意を促して行つた。勝たなければならぬことは人々の個の心を正しさへ引き戻し、それをささげるために磨かなければならないことに、詩はその短かい表現をはげんだ。

ここでは、戦時中においての詩の流行が記されている。戦争前に「誰も気をつけて特別に」「朗読詩」を「聴き入らうとする熱心さのある聞手はなかつた」。詩は「あつてもなくともいいものであつた」。しかし、大東亜戦争のため、戦争詩は「なくてはならないもの」になつ

た。それが朗読される時間になると、人々は皆「ラジオのそば」に集まって「じつと聞き入」った。そして、彼らはそれに感動して「喝采」した。言わば、詩が人々に好まれて流行っていた。また、それらの詩は国民の心を捉えて分かりやすいものであり、「民の心を高めるための絶叫」であると呼ばれている。更に、「ほぎ歌」、「田園にふとる野菜や、果実」、「街区」などの指摘から、「神國」の発表した時期を踏まえて、ここでの描写は「美以久佐」や「日本美論」などでの詩も指していると伺える。

以上のことを王朝小説「萩の帖」における「ざれ歌」をめぐる議論の部分と比較すると、両者は似ていることが分かる。例えば、ここでは、詩の流行が描かれている。「萩の帖」では、「ざれ歌」の流行も書かれている。もう一つは両者の表現である。詩は国民の心を捉える分かりやすいものであり、「人々の個の心を正しさへ引き戻」す導きである。「ざれ歌」は女心を捉えて、「低い言葉」あるいは分かりやすい言葉で、「国民を教へる」ものである。詩は「民の心を高める」役割を持っている。「萩の帖」の主人公大和は「人心を高きに従かしめる」歌を作るべきだと主張している。このように、ここでの詩の描写は「萩の帖」における大和と鹿門の争いの部分と対応できる。要するに、和歌を論じることを通して当時の詩の様子を表現する。あるいは当時の詩に刺激されて和歌を議論するようになつた。ここも王朝小説とその同時代の詩での裏表の関係を示している。表は王朝小説における和歌の議論であるが、裏は詩の議論である。共通な考え方は両者の繋がりとなつていて、また、前述した和歌でファイクションを求めるのは詩においても同じである。犀星は戦争に参加しなかつたが、戦場を生き生きと描いた。これはファイクションを求めるためであると言える。

犀星の心では、戦場が出来たのである。

以上のように、内容における共通点が示されている。えにしへの執着、戦いの描写、和歌の議論は犀星の王朝小説と同時代の詩に全部触

れられた。これらの共通な話題から、当時の犀星が注目していた物事が伺える。そして、この物事は犀星の王朝小説と同時代の詩での言葉遣いからも見られる。犀星の王朝小説と同時代の詩の言葉遣いには共通点がある。それは同じ言葉の使用である。以下に、それらの共通な言葉を考察して王朝小説と同時代の詩の関係を更に検討する。

まず、「萩の帖」を見る。「萩の帖」では、白菊についての記述が多い。白菊は重要な役割を演じている。一つは兄大和と妹綾野の親しさを表すためである。「第一話」では、その親しさが表現されている。綾野はいつも兄に「熱意と眞実」を払っている。例えば、彼女は自ら白菊で作った料理を大和に食べさせた。そして、それを見た他の妹たちには嫉妬された。そのため、他の妹たちは白菊の料理を食べたせいで大和が腹痛になつたという嘘を付いて綾野に心配させた。綾野は大和の事をあまり重視すぎて嘘を見分けることができなかつた。ここから、大和と綾野の関係は非常に親しいと見られる。もう一つは大和と親友鹿門の友情を表す役割である。「第四話」では、鹿門は「灯火のかはり」として、持つてきた白菊を半分分けて大和の車にも入れた。親切なやり方であると言える。大和は「見るまに明るくなる菊の夜照りを愛した」。しかし、途中で鹿門とざれ歌の争いのために、大和は怒つて「菊の束を道路に勢ひよく投げ出した」。「第五話」では、鹿門と大和のために、み代は白菊を整えて和え物を作つた話が書かれている。白菊を通して、み代の美しさを表現した。これは大和の恋の気持ちを深めてもらいる。このように、白菊は大和の綾野との兄妹の感情、鹿門との友情、み代との愛情においては、重要な役割を果たしている。また、白菊の美しさ、色の明かりや美味しさなども表現されている。

それでは、同時代の詩で、菊はどのように描かれているのか。「美以久佐」に収録されている詩「日本の朝」では、若者の戦場へ向かって戦う姿が書かれている。そこで、戦場へ向かう前の若者は「白菊の垣根を結んでゐた若人」と呼ばれている。注意すべきなのは「結うて

「ゐた」という表現が過去形であることだ。つまり、白菊の垣根を作る時間は過去である。なぜ今の時間はやらないのか。「飯をくふ間も放さない」という叙述から、その理由が分かる。皆は急いで戦場に向かうので、「飯をゆつくり食べる時間がない。白菊の垣根を作る時間も言つまでもない。作る余裕がない。この余裕はもともと平日に生活をよくさせたり、美しくさせたりする。しかし、戦争に参加するため、その余裕はなくなつた。」「白菊」が美的の代表であるならば、白菊の垣根を作るのは美を追求することである。この過去形は美の追求を捨てると語つてゐる。つまり、皆は美への追求を諦めて戦争に参加する。ここでは、「みな天の梯子を登つて行つた、／そして足つぎの梯子を蹴飛ばした」という句のように、戦争に参加する熱意が感じられる。

また、『日本美論』に収録されている詩「菊のかげ」においても、菊が描かれている。そこで菊のかげは「鶴の翔るかたち」のように美しいと賛美されている。このように、菊は同時代の詩で美的の代表として使われてゐる。

以上のことから、第二次世界大戦期間に犀星は菊、特に白菊に目を向けていると伺える。その向けるようになった理由は何だろうか。周知のように、この時は天皇の権威が高まつた時期である。そして、犀星が菊を描き出すのは天皇の「菊の御紋」の影響のためであると思われている。

しかし、これより、むしろ犀星の古典素養がその理由として考えられる。犀星は一九四二年三月に「六・白菊¹⁸」という作品を書いた。そこで、犀星は芭蕉の「白菊の目に立て見る塵もなし」^{ママママ}という句を取り上げて次のように述べてゐる。

はれぬ。——或は当夜、庭か株側の一隅に白菊の一鉢が置いてあつたのかも知れぬ。白菊があつたと見るのが穏當であらう。芭蕉はその白菊に事寄せ、その女の美しさを詠んだものであらう。会の果てた頃、芭蕉は稍々蒼ざめた顔付で、株側へ出てその腹に手をあて、見せた。そして腹が痛むことを園女に告げた。併し間もなく園女の薬で小康を得たのであつた。

園女の馳走振りはその庭の手入れにまで及んで、静な秋夜の涼爽を擅にした芭蕉は、先づ園女の清雅を詠じたものである。「白菊の目に立て見る塵もなし」の句境は、清純を讃へた以外のものとは思

い。ここで、芭蕉は園女の美しさを「白菊の目に立て見る塵もなし」と褒めている。白菊は女の美しさ、清純を代表しているように使われてゐる。また、芭蕉の「腹が痛む」ことは「萩の帖」での大和の腹痛と理由が異なつてゐるが、病状が同じである。発表した時間から、「六白菊」（芭蕉襍記 三笠書房・一九四二年三月）は「萩の帖」（婦人朝日）・一九四二年一〇月一日、『週刊婦人朝日』・一九四二年一月四日（一二月二三日）と同じ年であるが、月が少し早いと分かる。つまり、「萩の帖」で白菊による中毒の腹痛は「六・白菊」の影響であると考へられる。したがつて、犀星の「菊」は天皇の菊の影響よりも、あるいは「萩の帖」で白菊による中毒の腹痛は「六・白菊」の影響よりも、白菊による腹痛であると捉えられる。

いずれにせよ、王朝小説においても、同時代の詩においても、菊、特に白菊に対する好みは共通であると言える。このような好みは白菊以外に、鶴も數えられる。「巴」では、巴の声を「鶴のやうな聲音」、「鶴の声」とされている。女の声の鋭さと美しさは表現されている。「狩衣」では、主人公掃部助を棄てた衛門の頬を「ふくよかな鶴ののど」のやうに美しくかがやいたもの」と記されている。ここは女の美しさを示している。「萩の帖」の「第九話」で、綾野の声を「勢ひのある鶴のやうな聲音」と書かれている。「巴」と同じように、女の声の鋭さと美しさが描かれている。このように、鶴によつて女を表現している。鶴を通して美を表してゐる。このような美的な使用は同時代の詩にも見える。例えば、『美以久佐』の「日本の朝」では、戦争へ向かう

若者を「鶴のやうに美しく／鶴のやうに火を吐いた」と歌っている。「美以久佐」の詩「ふた、びその日」では、戦場における一生懸命戦いの日本人たちを「鶴のやうなつばさ」と褒めていた。両者での鶴は表現が異なっているが、美の代表として使われている。

また、共通な言葉として、「大和」もある。小説「えにしあらば」と「萩の帖」の男主人公の名前は皆「大和」である。ここでの「大和」は官職による名前である。これは同時代の詩での「大和」と異なっている。「美以久佐」の詩「女性大歌」での「大和の母」でも、『日本美論』の詩「子供ですか」での「大和の国」でも「大和」は皆日本を指している。

以上のように、言葉遣いにおいても、犀星の王朝小説と同時代の詩には共通点がある。

最後に、犀星が拘った色から両方の共通点をすこし検討する。小説「えにしあらば」での男主人公の「山吹色の狩衣姿」と「僧都の紫衣」、小説「狩衣」での「蘇芳」という名前と掃部助の「山吹色の狩衣」、小説「萩の帖」の紫、黄色の菊という描写から、犀星は山吹色、蘇芳、紫の色に拘っていたと伺える。王朝小説だけではなく、同時代の詩にも同じような表現がある。例えば、『日本美論』の詩「日本のあけばの」には「山吹いろ」が使われている。同じ詩集の詩「日本のゆふぐれ」の「蘇芳の襲」、詩「茶事」の「古い紫」という表現がある。詩「えにしあらば」には「黄なる衣」、「紫なる衣」、「はた蘇芳のいろの衣」という表現もある。このように、王朝小説において使った色は同時代の詩にも使われている。

以上のように、犀星の王朝小説と同時代の詩は内容や言葉遣い、色のこだわりなどで共通している。それらの共通点は何を示しているのか。これから、その意義を詳しく考察する。

三、王朝小説と同時代の詩の関係

以上の叙述から、犀星の王朝小説と同時代の詩は裏表の親密な関係を持つていると伺える。表は王朝小説である。裏は同時代の詩である。王朝小説での男女の別れ、歴史の争い、和歌の議論を通して、同時代の詩での戦争による人々の別れ、当代の戦い、詩の議論を語る。周知のようす、第二次世界大戦期間は文化が統制され、検閲が非常に厳しく、自由に書けなかつた時期である。そして、たくさんの作家たちは創作をやめたり、古典の世界に入つたりした。このような環境で犀星も皆のようすに書けなかつた。すなわち、王朝小説を創作する時も、自由に書けなかつた。したがつて、王朝小説は時代から離れている。しかし、たとえ離れてても、色々な方面でその同時代の詩と共通している。両者は表で異なっているが、裏で同じである。皆は同じ話題を扱っている。当時の犀星に注目されていた物事は考えられる。また、王朝小説と同時代の詩には裏表の関係以外に、お互いに影響されていたのもある。この点は言葉遣いと拘った色から見られる。まずは「大和」と「和歌」の使用である。王朝小説は『伊勢物語』、『大和物語』などに取材して作られたものである。ゆえに、「大和」を使うのはあたりまえのことである。「和歌」についての描写も不思議ではない。しかし、これらは同時代の詩にも使われている。ここで、同時代の詩は王朝小説の創作の影響を受けたと言える。また、拘った色というと、王朝小説で使われる分には問題がない。なぜなら、平安時代の話のためであるからだ。蘇芳、紫、山吹色などはすべて古代に身分のある人によく使われていた色である。『萩の帖』では、使われている人々は皆身分がある人ばかりである。官職に付くことが多く描かれていることから、犀星は王朝小説を書いた時、身分のことを意識していたと考えられる。つまり、尊い色の使用もおかしくない。貴族の身分を表現するためであるからだ。それに對して、同時代の詩は平安時代から離れて

現在を描いている。それは王朝小説の影響のためであろう。このような影響は伊藤¹⁹も次のように述べている。

『美以久佐』は「みいくさ、御戦」である。今となつては、こういふ古典文学ふうの用字は嫌味だけれど、皇軍、聖戦などの自讃語の時流からすれば、その風潮に適つた書名だつた。彼の王朝作ふう意識が、こういう形でこぼれ出たともいえる。

ここで、「美以久佐」という古典的な書名は「王朝作ふう意識」が「こぼれ出た」ために付けられたものであると記されている。王朝小説は同時代の詩の言葉遣いに影響を与えた。また、同時代の詩はほとんど第二次世界大戦を描く戦争詩である。王朝小説で歴史の戦いへの関心と描写は戦争詩の影響がないとは考えがたい。

このように、犀星の王朝小説とその同時代の詩は裏表の関係を持ち、お互に影響した。更に、両者は共に犀星文学を伝承している。この点は菊と鶴へのこだわりから見られる。なぜとすると、菊、あるいは白菊と鶴は王朝小説以前に既に使われているからだ。たとえば、『第一愛の詩集²⁰』の詩「自分のそだてた菊」では、次のように書かれている。

まるで天與の秋晴だ
縁側にしやがんで見てみると
菊の大輪が暖かく伸びほつれて
その永かつた花季に辿りついたことを今朝は示した
杜んな夏の蝶のやうに
一つ一つ心を籠めて
ほつれ整へゆくのだ
何といふ鮮やかな感銘だ

彫り上げたやうに立派だ
まるで歓喜に菊は伸び上つてゐるのだ

ここでは、菊の温かさと美しさが賛美されている。菊が好きな気持ちは明確に感じられる。この詩だけでなく、『高麗の花²¹』の詩「菊を彫る人」にも菊が賛美されている。

(前略)

その古い床の間の前で

朝になると

庭をへだてた障子硝子の明りで

ぐいぐい菊の花を彫つてゐる人がある。

花は白い、

一瓣ごとに鮮かに雪のやうに彫られる。

葉はみどりに——。

朝のあかりのある間に

菊は鋭い白さを砥いてゆく、

鹿をつれた石刷りの翁かも知れない。

それとも聰しげな童子であるのか。

ともあれ清い香ひて

ぐいぐいゑぐり立てて

美しい白菊が彫られてゆくのだ。

いいでも、菊の美しさが賛美されている。そして、菊は白菊である。ただし、ここでの菊は植物ではなく、彫り物である。だが、白菊が美しいという考え方は変わらない。

このように、犀星文学において、菊は既に早く表現された。王朝小

説と同時代の詩における使用は新しくない。王朝小説と同時代の小説はともに犀星文学の菊を継承していると言える。このような伝承は菊だけでなく、鶴も同様である。例えば、「詩集・鶴²²」がある。また、「煤と鶴²³」も犀星に書かれている。すなわち、鶴は王朝小説時代以前に既に犀星の注目を受けている。いずれにせよ、犀星の王朝小説と同時代の詩はともに犀星の以前の文学を継いでいる。犠牲と言われている同時代の詩にも犀星なりの表現があると分かつてきた。

以上のように、犀星の王朝小説は同時代の詩と深く関わっている。両者の関係を切斷した先行論を更新できるようになつた。同時代の詩は王朝小説を守るために犠牲になつたものではなく、低く評価されるべきではない。また、このような親密な関係から、当時の犀星文学の具体的な状況も少し明らかになつてきた。同時代の詩の地位も見直された。今後、今回の研究を踏まえて、引き続き王朝小説と同時代の詩を考察して両方の関係を更に探求する。

[注]

- 1 一九四〇年から「伊勢物語」、「大和物語」などに取材して室生犀星に書かれた作品である。これらの作品は室生朝子に「室生犀星全王朝物語」に取り入れて編集された。
- 2 吉田精一「室生さんの王朝物」「室生犀星作品集」月報、新潮社、一九五九年四月、吉田精一「室生犀星と王朝物語(2)」「國文学 解釈と鑑賞」一九六〇年六月、本多浩「室生犀星ノート——「王朝もの」を中心にして」『徳島大学学芸紀要（人文科学）』一九六九年、小谷恒「王朝小説の背面から」「犀星の会」会報、一九八一年四月、中村真一郎「室生さんと王朝物について」「室生犀星全王朝物語」月報・上、作品社、一九八二年五月、小谷恒「心残りの記」「室生犀星全王朝物語」月報・上、作品社、一九八二年五月、浜田寸躬子「犀川のかたりかけたもの」「室生犀星全王朝物語」月報・上、作品社、一九八二年五月、奥野健男「犀星のなかの「王朝もの」「室生犀星全王朝物語」月報・下、作品社、一九八二年六月、中村真一郎「犀星王朝小品集解説」「犀星王朝小品集」岩波書店、一九八四年三月
- 3 吉田精一「室生犀星と王朝物語(2)」「國文学 解釈と鑑賞」一九六〇年六月
- 4 吉田精一「室生さんの王朝物」「室生犀星作品集」月報、新潮社、一九五九年四月
- 5 中野重治「戦争の五年間」「室生犀星全集 第八巻」新潮社、一九六七年五月、伊藤信吉「室生犀星 戦争の詩人・避戦の作家」集英社、二〇〇三年七月
- 6 室生犀星「解説」「室生犀星全詩集」筑摩書房、一九六二年三月
- 7 吉田精一「室生さんの王朝物」「室生犀星作品集」月報、新潮社、「一九五九年四月、吉田精一」「室生犀星と王朝物語(2)」「國文学 解釈と鑑賞」一九六〇年六月、本多浩「室生犀星ノート——「王朝もの」を中心にして」『徳島大学学芸紀要（人文科学）』一九六九年、小谷恒「王朝小説の背面から」「犀星の会」会報、一九八一年四月、中村真一郎「室生さんと王朝物について」「室生犀星全王朝物語」月報・上、作品社、一九八二年五月、小谷恒「心残りの記」「室生犀星全王朝物語」月報・上、作品社、一九八二年五月、浜田寸躬子「犀川のかたりかけたもの」「室生犀星全王朝物語」月報・上、作品社、一九八二年五月、奥野健男「犀星のなかの「王朝もの」「室生犀星全王朝物語」月報・下、作品社、一九八二年六月、中村真一郎「犀星王朝小品集解説」「犀星王朝小品集」岩波書店、一九八四年三月
- 8 九里順子「肉体的還元という起点——戦時下の犀星詩——」「キリスト教文化研究所研究年報」宮城学院女子大学、二〇一〇年、宮木孝子「詩集『美以久佐』——室生犀星の戦争詩を読む——」「実践女子大学短期

1 朝小説の背面から」「犀星の会」会報、一九八一年四月、中村真一郎「室生さんと王朝物について」「室生犀星全王朝物語」月報・上、作品社、一九八二年五月、小谷恒「心残りの記」「室生犀星全王朝物語」月報・上、作品社、一九八二年五月、浜田寸躬子「犀川のかたりかけたもの」「室生犀星全王朝物語」月報・上、作品社、一九八二年五月、奥野健男「犀星のなかの「王朝もの」「室生犀星全王朝物語」月報・下、作品社、一九八二年六月、中村真一郎「犀星王朝小品集解説」「犀星王朝小品集」岩波書店、一九八四年三月

2 九里順子「肉体的還元という起点——戦時下の犀星詩——」「キリスト教文化研究所研究年報」宮城学院女子大学、二〇一〇年、宮木孝子「詩集『美以久佐』——室生犀星の戦争詩を読む——」「実践女子大学短期

大学部紀要 一〇一九年三月

9 伊藤信吉 「室生犀星 戦争の詩人・避戦の作家」 集英社、二〇〇三年

七月

暮尾淳 「解題 伊藤信吉と室生犀星」 「室生犀星 戦争の詩人・避戦の作家」 集英社、二〇〇三年七月

10 室生犀星 「萩の帖」 全国書房、一九四三年三月

11 室生犀星 「美以久佐」 千歳書房、一九四三年七月

12 室生犀星 「日本美論」 昭森社、一九四三年一二月

13 室生犀星 「室生犀星全王朝物語 上」 (室生朝子編、作品社、一九八二年五月) にも収録されているので、平安時代の話ではないが、王朝小説として扱う。

14 室生犀星 「萩の帖」「萩の帖」 全国書房、一九四三年三月

15 九里順子 「肉体的還元」という起点——戰時下の犀星詩——」「キリスト教文化研究所研究年報」宮城学院女子大学、二〇一〇年

16 室生犀星 「神國」「神國」 全国書房、一九四三年一二月

17 室生犀星 「六白菊」「芭蕉襍記」 三笠書房、一九四二年三月

18 伊藤信吉 「第三篇 戰争の詩人」「室生犀星 戦争の詩人・避戦の作家」

19 集英社、一〇〇三年七月

20 室生犀星 「第二愛の詩集」 文武堂書店、一九一九年五月、

21 室生犀星 「高麗の花」 新潮社、一九二四年九月

22 室生犀星 「詩集・鶴」 素人社書屋、一九二八年九月

23 室生犀星 「煤と鶴」「慈眼山隨筆」 竹村書房、一九三五年二月

室生犀星における王朝小説とその同時代の詩 —『萩の帖』と『美以久佐』、『日本美論』を中心に—

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻
孫 媛 媛

Muro Saisei's Dynastic Novels and his Contemporaneous Poems
—A Comparison between the novels of *Haginojyou* and the poems of *Miikusa* and *Nihonnbironn*—

Division of Human and Socio-Environmental Studies
Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies
Sun Yuanyuan

Abstract

Muro Saisei wrote many dynastic novels during the Second World War, as well as many poems. Works of the same period would generally be connected, but in evaluations of Saisei's dynastic novels and his contemporaneous poems the former are mainly criticized for Saisei's misunderstanding of the classics and his lack of writing compared to the classics; yet, they are valued for the beauty of lyricism and creation. In contrast, poems of the same period are criticized for giving assistance with war. When he edited The Whole Poetry of Muro Saisei published by Tikumasyobou, he deleted many of this period's poems about the war. He said that he "didn't want to see the impurity of his heart" when it comes to the war. In this way, the connection between Saisei's dynastic novels and his contemporaneous poems is divided. However, a comparison of Saisei's dynastic novels with his poems of the same period reveals many similarities. In this paper, we compare the collection of dynastic novels, Muro Saisei's *Haginojyou*, with the collections of poems from the same period, his *Miikusa* and *Nihonnbironn*, and study their common points. Then, I will analyze the relationship between them and explore hidden facts and their significance.

Keyword

Saisei, dynastic novel, poem